

銀漢の尾

森岡 正作

栗飯の

釣れてよし釣れずともよし鯨日和
嫁にやる日の啄木鳥のよう叩く
朝採りの腰まで露に濡れてをり

銀漢の尾に触れて酔ふ柚の宿
猛禽の一撃食らふ穴惑
文士碑の土台の隙間つづれさせ
竜淵に潜みてをらむ昼の酒

我が家の栗も収穫時となった。今年には猛暑が影響したのか毬がやや小ぶりに思えるが、跳び出る栗のこつとした重さは何とも言い難い手応えである。昔は専ら裏山に出かけ、山栗いわゆる柴栗を拾ったものであったが、今は見た目の良い栗ばかりなので、柴栗は里に出て来ないようになりに食糧難の熊にあげた方がよいのである。

登四郎先生の御句に〈栗飯のふつくら炊けて祝ぎころ〉がある。我が家でも収穫の最初は栗おこわと決めているようで、何の慶事がなくても「祝ぎころ」の気分になる。何時だったか、栗おこわから小豆を取り除き、茶碗に栗を多めに盛り上げて顰蹙を買ったことがあった。栗の渋皮を剥く作業の大変さを知れば、作ってくれた人が怒るのは当然である。ともかく炊き立ての新米のつやつやした中で輝く、栗の黄金色は眩しく目出度い。